

# 臼杵石仏の紹介と研究

## — 小城長次郎の日記を中心に —

仲 嶺 真 信

### 【要 旨】

この日記は、臼杵石仏の研究を進める上において、小城長次郎『深田の石仏』と同様に、関連する重大な出来事を可能な限り克明に記録しており、必須の基本文献と言っても過言ではない。小論において『六不之生涯 小城長次郎日記』（以下『六不之生涯』と略す）に見える「臼杵石仏訪問者」の分類を試みながら、その歴史資料としての価値が高いことに言及した。

### 【キーワード】

臼杵石仏、瑞典皇太子、小川琢治、濱田耕作、小城長次郎

## はじめに

大正期から昭和初期にかけて、臼杵石仏を訪問した人々とその内容に関する詳細かつ貴重な記録を残した人物がいる。永年臼杵町役場において書記を務めた小城長次郎である。最近その日記『六不之生涯』\*<sup>1</sup>が近親者により刊行され、筆者は寄贈を受けた。この日記は、臼杵石仏の研究を進める上において、『深田の石仏』\*<sup>2</sup>と同様に、関連する重大な出来事を可能な限り克明に記録しており、臼杵石仏の研究上、必須の基本文献と言っても過言ではない。以下、拙稿において、小城長次郎の記録に基づき「臼杵石仏」関連の出来事を明らかにしていくことにする。とりわけ、小城が臼杵町役場書記としての在任中の最大の歴史的な出来事は、大正15年の瑞典皇太子同妃両殿下の臼杵石仏訪問であり、当時の記録等を掘り起こして見ると、実に空前絶後の大事であったと言える。拙稿においては、その前後の出来事を順次紹介しながら、石仏研究黎明期における小城長次郎の業績とその意義について言及したいが、その前にいくぶん臼杵石仏に関する紹介と研究の歩みに触れておきたい。

## 【1】 臼杵石仏の紹介と研究のはじまり

小城が臼杵石仏に関与する契機は、臼杵町役場に書記として勤務したことは勿論のこと、以下の通り小川琢治博士の調査研究に端を発している。いわゆる日本の石仏研究は、大正2（1913）年、小川博士が、臼杵石仏を訪問したことがきっかけとなり、後世、近畿、東北、北陸等でもそれぞれの報告や紹介が行われた。

大正3年小川博士は『日本石仏小譜』（写真集）\*<sup>3</sup>を刊行し、臼杵石仏の優れた価値を世の中

に紹介した。それ以前の近代の識者で、日本の石仏を紹介した人は皆無に等しかった。したがって、小川博士は、今日の日本の石仏研究の基礎を開拓された偉大な先覚者であると言える。

一方、小川博士の研究に触発され、大正6年(1917)年、帝国美術学校(現東京芸大)の大村西崖教授は、臼杵市出身の日名子実三と共に臼杵石仏の調査を行い、その成果を「大分県下の古石仏に就いて」\*4として発表した。また大正7年(1918)年刊行『東洋美術大観 第15冊 彫刻之部』\*5では、臼杵石仏の写真4枚を紹介した。この時すでに、大村教授が、臼杵石仏は、法隆寺の壁画、龍門石窟、アジャンター石窟等と共にきわめて重要であると指摘している。言い換えれば、平成7(1995)年の国宝指定以前に、すでにその重大な意義を見出していたわけである。

さらに大正10(1921)年、小野玄妙博士は、帝国美術院(大正8年設置:当時、森鷗外院長。現日本芸術院)の依頼を受けて帝国美術学校・岡田三郎助教授と協同調査を実施した\*6。この時小野教授は、初めて密教の立場から考察を行ったが、結論は後日の研究を待つべきとした。当時、古園石仏の大日如来の手(智拳印)は、未発見であったので尊名を特定せず、賢明な選択をしている。

この大正10年以降、臼杵石仏関連の出版が目立っている。大正10年、京都の仏教美術社は『仏教美術第一巻第三号』で「満月寺磨崖仏乃研究」\*7と題して特集号を組み、また同年奈良在住の工藤利三郎(写真家)は『豊州磨崖石仏乃研究 日本精華・第九輯』\*8(写真集)を刊行し、写真のみで臼杵石仏を紹介した。そのような動向に呼応し、すでに大正11(1922)年、地元臼杵では臼杵石仏保存会を組織している\*9。

先述の小川博士の基礎的研究を京都帝国大学の組織的研究として考古学・美術史学・建築史学分野の学際的人材を得て継承・発展させたのが、濱田耕作博士である。その成果が、大正14(1925)年刊行『豊後磨崖石仏の研究』\*10である。この著書が、濱田博士から東洋の考古学に関心を抱くスウェーデン皇太子に献呈されたことが契機で、大正15(1926)年10月、皇太子の臼杵石仏訪問が実現した。当時の地元紙(豊州新報と大分新聞)は連日貴重な記事を掲載している\*11。

さて、以上の学術研究の流れと歩調を合わせながら、地元臼杵において小城が果たした役割は、どのようなものであったのか、このことについて以下に詳述していく。

## 【2】臼杵石仏を地元で記録・案内・顕彰し続けた「小城長次郎」

### (1) 小城長次郎について

以下は、小城長次郎『六不之生涯』に基づく。

慶応3(1867)年生まれ。大分師範に学び、明治20(1887)年大分県臼杵小学校訓導、以後大正3(1914)年市浜小学校校長を退職するまで、激動の明治初期に、新教育制度の先頭に立っていた。その後臼杵町役場の書記となり、郷土史家として町史編集、臼杵の石仏の研究、来訪者の現地案内等に力を注いだ。役場退職後は、旧臼杵藩主稲葉家に請われて上京し、昭和12(1937)年71歳まで奉職。日中戦争を契機に昭和15(1940)年故郷の臼杵に戻り晴耕雨読の生活をとおしていた。日記は明治17(1884)年から付け始め、昭和16(1941)年まで続いている。昭和20(1945)年終戦を前に78歳の生涯を閉じた\*12。

この著書に収録されている写真(図1 大正15年10月7日 スウェーデン皇太子を臼杵磨崖仏にご案内 左から二人目が小城長次郎)\*13に基づき、大分合同新聞社提供の写真(図2)\*14を分析したら、この中に、小城長次郎が写っており、瑞典皇太子に随行し案内をしていることが判明

した。

『六不之生涯』収録の写真は、大阪毎日新聞に掲載されたものであり、『日記』はつぎのように記している。

「大正15年 10月27日 先日瑞典皇太子殿下御来町ノ砌、大阪毎日新聞ニ掲載サレシ深田日吉塔前ニ於ケル場面ノ写真ハ、此上ナキ紀念ナレバ、如何ニモシテ其焼増一葉家宝トシテ保存シタク、即、同新聞関門支局長藤井公平氏ニ照会依頼セシ処、快諾シ呉レ殊に大形ニ引延バシ出来上リタリトテ、本日一葉贈越サレタリ」\*15



大正15年10月7日  
スウェーデン皇太子を  
臼杵磨崖仏にご案内  
左から二人目が小城長次郎



図2 瑞典皇太子御一行 大分合同新聞社提供

図1 『六不之生涯』収録

## (2) 『六不之生涯』に見える「臼杵石仏訪問者」の分類

小城の役割は、以下の通りに分けられる。

- ①臼杵石仏への訪問者を案内する。
- ②臼杵石仏に関わる出来事と訪問者の記録を残す。
- ③公私にわたり日記・記録を残す。

以下、臼杵石仏に関する記事について『六不之生涯』及び『深田の石仏』から抽出し、下記の通り概要を分類した(表1 4-6頁参照)。

## (3) 臼杵石仏訪問者及び紹介(研究)者について

以下、臼杵石仏に関する事柄について『六不之生涯』及び『深田の石仏』から抽出する。

すでに拙稿にて触れた通り臼杵石仏の最初の紹介は、大正2-3年、京大教授・小川琢治が調査及び『日本石仏小譜』を刊行したことから始まる。またその成果を示す最初の学術論文は、大正3年(9月・10月)発表の小川琢治「九州の石仏 一・二」\*16である。

### 1) 大正4(1915)-9(1920)年 (\*括弧内の年月日は『六不之生涯』に基づく:例 T4.09.17/)

●は『深田の石仏』に掲載の印  
大正4年8月、日豊線が臼杵まで開通(T4.08.15)し、それまでは、交通不便な九州の片隅であったが、便利になり同年当時別府滞在中の台湾民政長官内田嘉吉が、夫人同伴で小城の案内付き観光をしている\*17(T4.09.17)。これは小城日記に見える臼杵石仏関連記事の初出となる。

大正4年10月貴族議員徳川侯爵(頼倫)が夫人同伴で観光を行った\*18(T4.10.08)。

(6頁下段へ続く→)

表1 『六不之生涯』・『深田の石仏』に見える「白杵石仏訪問者」

(年月日は、大正=Tとし、月日の表記は、1月1日を例とすれば01.01と記した。●印は『深田石仏』掲載を示す)

所属・組織	訪問者及訪問年月日
官僚 (21件)	①台湾民政長官小四位勲二等内田嘉吉夫人同伴 (T4.09.17 *観光) / ②山本農相秘書官小坂順造 (T10.05.07 *長野豊州新聞社長) / ③司法大臣大木遠吉一行 (T11.05.05 *堺田町長外有志随員) / ④鉄道省史蹟調査嘱託・小此木忠七郎 (T11.08 ●) / ⑤内務省史蹟調査会委員・文学博士黒板勝美 (T11.09. ●) / ⑥専売局長野中清 (T12.05.01) / ⑦文部大臣鎌田栄吉一行 (T12.05.05) / ⑧内務省社寺局考證官史跡考查員荻野仲三郎・内務省嘱託田澤金吾 (T12.08.06-08.07 *県属随員) / ⑨荻野・田澤再来町2日間 (T12.08.24) / ⑩元司法大臣松室致 (豊前出身) 視察 (T12.11.24) / ⑪長崎控訴院検事長代理検事藤井健一 (T13.03.04 *大分地方裁判所検事正和田良平随員) / ⑫長崎控訴院長手塚太郎 (T13.03.16 *大分地方裁判所長諸隈元次郎随員) / ⑬長崎控訴院部長駒田重義一行視察 (T13.05.08) / ⑭当町出張中の検事及予審判事列 (T13.05.15 *中野当警察署長より依頼) / ⑮大分刑務所長江藤想六 (T13.07.11 *大橋寺滞在中) / 矢野文部省督学官視察 (T13.10.07) / ⑯内務省土木局技監市瀬□ (T14.04.29) / ⑰専売局経理部長佐々木謙一郎、熊本専売局長石原峯樾、福岡同支局長安部栄 (T14.06.04) / ⑱大蔵省専売局製造部長石井淳二郎 (T14.10.27 *この日塔ヶ迫畑で五輪塔発見) / ⑲熊本専売局長有田靖 (T15.06.19) / ⑳宮内省式部官山縣武夫 (儀式課長) 並びに属某、今秋瑞典皇太子殿下石仏視察の下検分 (T15.06.23 *矢野県属随員、足立郡書記同行) / ㉑京都府庁技師兼京大講師坂谷良之進 (T15.10.01 *鳥居に付き蘊蓄深し)
新聞社 (8件)	①大阪朝日新聞記者・日出町出身・土屋大夢 (T4.12.19) / ②白杵新聞・白陽新聞 (T6.10.11) / ③大阪毎日新聞社長本山一彦 (T10.04.24) / ④国民新聞社長徳富猪一郎夫妻 (T11.04.25) / ⑤大阪毎日新聞記者・菊池幽芳 (T13.04 ●) / ⑥大阪毎日新聞社専務取締役高木利太外記者3名視察 (T14.01.25) / ⑦大分在住新聞記者数名並に鎌野学務課長、矢野県属一行予行視察 (T15.09.14) / ⑧大阪毎日新聞関門支局長藤井公平により瑞典皇太子案内の際の写真を寄贈さる (T15.10.27)
大学 研究者 (13件)	①京大教授・小川琢治 (T2.08 ●) / 小川琢治『日本石仏小譜』出版 (T3. ) / ②京大教授・天沼俊一 (T5.01 ●) / ③東京美術学校教授・大村西崖 (日名子実三を伴う T6.09.01 ●) / ④京大教授・喜田貞吉 (T6.12.28 / T7.01.07) / ⑤東大教授・関野貞 (T10.01.04) / ⑥早大倉津八一 (T11.01.27) / ⑦京大濱田耕作・澤村専太郎 (鈴木増次郎写真師随員 T11.04.06) / ⑧東大工学部長・塚本靖 (T11.08 ●) / ⑨内務省史蹟調査委員・東大教授黒板勝美 (T11.09 ●) / ⑩京大濱田博士より深田石仏に付、文献及意見照会、返書送る (T14.03.25) / ⑪京大教授・松本文三郎 (T13.01 ●) / ⑫京大濱田博士より『豊後磨崖石仏の研究』の寄贈 (T14.08.29) / ⑬帝大史料編纂官鷺尾順教、同補文学士藤本了泰、同嘱託伊東四郎、史料調査 (T15.03.12) / ⑭京都府臨済宗大学教授、花園中学校長手島文倉一行視察 (T15.08.09)
宗教家 (1件)	①西本願寺・大谷尊由 (T11.10 ● *尊由の兄は光瑞)
美術院 博物館 (2件)	①岡田三郎助画伯・小野玄妙 (仏教大学) 教授 (T10.08.30) / ②帝室博物館学芸委員兼文部省古社寺保存会委員・新納忠之助 (T7.04.28)
芸術家 (3件)	①富田溪仙 (T10.03 ● *日本画家) / ②橋本関雪 (T11.01.22 *日本画家) / ③松瀬青々 (弥三郎) 来町 (T14.04.08 *俳諧)
写真家 (1件)	①工藤利三郎『豊州摩崖石仏 日本精華・第九輯』(日本精華) (T10.04.20発行) ●
美術批評家 (1件)	①田口菊汀「京都から摩崖仏へ」(『中央美術7-4』(T10.04.01発行) ●

所属・組織	訪問者及訪問年月日
大分県 (7件)	①(県)本間理事官(T6.12.28/T7.04.28)、河野県属、日名子別府助役、本庄(豊州新報)・前田(大分新聞)記者、(郡)尾形郡長、松井書記、(白杵)堺田町長、甲斐町会議員、佐藤(白杵記者)、川野(南津留村長)(T7.04.28)／②新妻本県知事(T8.05.26)(第18代大分県知事・新妻駒五郎:1855年-1937年)／③白杵町長・松井郡書記(T10.01.04)／④平賀内務部長(T11.07.04 *林郡長と出張)／⑤大分県知事松村義一一行視察(T14.07.26 *第21代知事)／⑥石仏前木柵竣工、県土木課員2名同行(T14.10.31 参考:九水専務□□氏の寄進に係る木柵過半出来 *T14.10.27)／⑦郡制廃止に付き本日廃庁式(T15.06.26)／⑧本県警察教育両部長官官房主事予行視察(T15.10.03 *是より先9月20日を以て吏員を庶務、送迎、設備、道路、石仏の5係に分け、これに総務を置き歓迎準備をなす *白杵町重複)
共進会 (2件)	①富田溪仙・山内多門・松本古村(3人共画家、九州八県聯合共進会審査員T10.02.07 *県内務部長随行)／②朝倉文夫・権藤種男・片岡角太郎・日名子実三(T10.03.23 *堺田町長・尾形郡長・平山県会議長・佐藤警察署長・玉田郡書記随行)
瑞典皇太子	①瑞典皇太子同妃兩殿下一行、本日午前8時30分亀の井旅館出発、元町視察後午前11時深田到着／供奉員東宮大夫ニルス、東宮武官ルーデベック、公使書記官同夫人、式部官山縣武夫、同子爵相馬孟胤、外務事務官武藤義雄、京大教授濱田耕作博士、小川琢治博士、県知事(欠員につき代理内務部長)、学務部長、以下県会議長其の他及び関西主なる各新聞記者、写真班(T15.10.07)
皇族・華族 (3件)	①貴族院議員徳川侯爵(頼倫)観光の為、夫人同伴来町 堺田町長と共に案内(T4.10.08)／②大給子爵並に夫人(T9.11.15 *大給松平家、大分の府内城主で後に大給子爵。大給近孝子爵。貴族院議員、父:大給近道)／③山階宮藤麿王殿下視察(T13.07.27 *宮内省供奉員2名、県保安課長及日名子史蹟調査員其他随行、堺田町長、林郡長、中野警察署長其他同行) *山階宮殿下は東大・黑板勝美門下、筑波藤麿 / *黑板視察(T11.9 大学欄と重複)
軍隊(8件)	①第12師団長陸軍中將・柴五郎(T7.06.29)／②(佐伯湾碇泊中)聯合艦隊主計長海軍大佐冬木庄一郎(T12.07.27)／③第2師団兵士3000名来町宿営・福岡第24聯隊第2隊長少佐板坂順治石仏視察(T12.11.16-17)／④白杵港碇泊中の練習艦隊司令部付軍艦浅間乗組海軍薬劑中尉岩崎齋介視察(T13.07.26 *同艦に高松宮乗組 *装甲巡洋艦の1隻で浅間型装甲巡洋艦のネームシップ)／⑤佐世保海軍人事部員海軍少佐中村季雄(T14.06.19)／大分聯隊区司令官歩兵中佐宇都宮□□一行(T14.06.21)／⑥第6師団長福田彦助中将同副官田中丸勝市少佐(T15.06.04)／⑦陸軍造兵廠技師・長澤寸美遠一行視察(T15.12.31 *丸毛豊田郎の依頼)／⑧長澤寸美遠の紹介で京橋区日吉町の南春峯来宅(S3.07.04 *英文雑誌に深田石仏掲載のため)／南春峯より「ゼ ビュース エンド レビウス オブ ジャパン」8月号届く、一冊白杵町長に送る(S3.08.10)／南春峯に瑞典皇太子写真を複製し送る、9月号雑誌に掲載の為(S3.08.30)
金融(5件)	①(大分)二十三銀行員約80名(T10.01.27)／②日本銀行門司支店長保田次郎・二十三銀行重役仲尾(T12.08.28)／③二十三銀行頭取長野善五郎夫妻(T15.07.20)／④二十三銀行杵築支店員一団視察(T15.10.17)／⑤日本銀行門司支店長関根善作視察(T15.11.07 *二十三銀行重役久保寺良吉、大分銀行支配人羽田栄重随行、二十三銀行白杵支店長福田多吉より依頼)
電力・企業 (2件)	①九州電気株式会社専務取締役・棚橋琢之助、資財一千元を提供し、県に木柵建設委託(T14 ●)／②和田豊治一行30名来町、石仏視察(T11.11.09)
地元(会社) (1件)	①佐伯日本セメント会社社員曾根亥太郎(曾根専務の兄)外6名視察(T15.10.31 *堀町会議員より紹介)

所属・組織	訪問者及訪問年月日
地元（青年団） （1件）	①下南津留青年団に講話（T11.02.04）
地元（女学校） （3件）	①佐伯高等女学校150名（T11.02.17）／②県女子師範学校訓導2名、教生10余名視察（T13.02.20）／③岩田高等女学校職員生徒530名視察（T14.02.14）
地元（小学校） （1件）	①本郡中部小学校教員会長の要請により会員20数名に深田石仏現地講話（T12.05.27）／
県外団体 （5件）	①八幡浜観光団10名（T12.01.27）／②柳井町視察団（T12.11.06）／③九州鉱業学会員一団視察（T15.10.17）／④和田豊治一行30名来町視察（T11.11.09）／⑤竹越與三郎（三叉）視察（T15.10.19 *前大野郡長宇都宮喜大、大阪商船会社別府支店長久保勝之進随行）
県・個人 （1件）	①安部午生（婦白中 T10.05.11）
白杵石仏関係地 （3件）	①堺田町長の命により（愛媛）太山寺調査（T11.03.16-03.19）／②太山寺住職宮崎智全白杵視察（T11.07.09-07.10）／③大分、大野二郡の石仏調査（T14.10.23-25 *大分市元町、東植田村高瀬の石仏、犬飼町渡瀬石仏、井田村、長峰石仏、菅尾石仏、宇対瀬石仏、南緒方の石仏、内山観音）／太山寺住職宮崎智全1月31日遷化（T15.02.10 *来る22日本葬）
白杵町役場 （2件）	堺田町長辞表提出（T15.06.12 *送別会 T15.06.17）／①新町長と深田出張、石仏に付き詳細説明（T15.08.17）／②本県警察教育両部長官官房主事予行視察（T15.10.03 *是より先9月20日を以て吏員を庶務、送迎、設備、道路、石仏の5係に分け、これに総務を置き歓迎準備をなす *大分県と重複）／小城長次郎、白杵町役場を依頼退職（T15.10.30 *白杵町長 東保高）
稲葉家 （1件）	①稲葉直通（殿）の深田石仏視察に同道（T11.11. *稲葉銀次郎・水谷幸太郎・丸毛豊太郎同行）／稲葉家より東京本邸家従職に聘用致したい旨の電話、相談に取りかかる（T13.05.22）／稲葉家より聘用の件、遺憾ながら断る（T13.06.04）／稲葉家より院様付後任依頼（T15.11.19）／遂に御請決す（T15.12.02）／稲葉家殿様に拝謁、藤ヶ谷別邸詰に備入辞令（S2.01.17 *直通の父=稲葉順通）／御別邸出勤（S2.01.18）
執筆過程 『深田の石仏』 （11件）	①草案作製に着手（S3.01.16）／②古文書篇ほぼ終え、巡覧篇の清書に取りかかる（S4.03.23）／③巡覧の巻清書終わる（S4.04.04）／④諸説の巻清書終了、翌日より更に推敲（S4.04.26）／⑤昨年5月起草の巡覧の巻、由緒の巻、諸説の巻、旧史の巻、以上四篇ほぼ脱稿。凡例、序文、内容数カ所を残す（S4.05.18）／⑥更に推敲にかかる（S4.06.26）／⑦帝国図書館に行き調査（S4.11.26）／⑧上野帝国図書館に行き調査（S5.11.16）／⑨原稿清書（複写）にとりかかる（S6.01.25）／⑩第一篇巡覧の巻清書終了（S6.06.21）／⑪第三篇観賞の巻清書終了（S6.07.21）／院様の写真を載く（S8.11.17 *武宮写真館にて撮影）
参考	大正8（1919）年10月19日武宮写真師を招き家内中撮影（*武宮写真館絵葉書）に白杵石仏あり。

（↓3頁から続く）

大正5年に京大教授・天沼俊一は「深田の石塔」\*<sup>19</sup>を発表し、同年、大阪朝日新聞記者・土屋大夢（大分県日出町出身）\*<sup>20</sup>が訪問している（T4.12.19）。

大正6年東京美術学校教授・大村西崖（日名子実三を伴う T6.09.01●）も訪問し、「大分県下の古石仏に就いて」\*<sup>21</sup>を発表している。

この研究者の訪問が続く流れの中で、本間理事官\*<sup>22</sup>からの依頼を受けて小城が、京大講師喜田貞吉\*<sup>23</sup>を案内している（T6.12.28）。

年明けさっそくこの様子を小城は新聞に公表している。すなわち「大正7（1918）年 1月7日 深田ノ石仏ト喜田貞吉博士ナル題目ニテ、白杵両新聞ニ投書」\*24と見える。

この陸続たる訪問者に伴って地元大分でも新たな組織的対応が生じている。大正7年4月、帝室博物館学芸委員兼文部省古社寺保存会委員の新納忠之助が調査に訪れており、この時、地元では県から本間理事官、河野県属、日名子別府助役\*25、本庄豊州、前田大分両記者随行し、郡から尾形郡長、松井書記、堺田町長\*26、甲斐町会議員、佐藤白杵記者、川野南津留村長等が出迎えている（T7.04.28）。この時、新納は大分市大正紀年館にて「我が日本の彫刻」の題で講演している\*27。

大正7年5月大村は『東洋美術大観 第15 彫刻部』を刊行（審美書院 \*白杵石仏写真4枚掲載）し、さらに大正9年「豊後磨崖石像－帝国美術院にて調査に着手す－」\*28を発表。

同様に大正9年朝倉文夫は「豊後美術史の研究を提唱す」及び中村不折は「日本一の石仏と其保護に就いて」を発表した\*29。

前後するが、大正7年には、第12師団長陸軍中將・柴五郎\*30が視察している（T7.06.29）。また、大正8年、新妻駒五郎大分県知事\*31が視察（T8.05.26）。大正9（1920）年、大給子爵\*32並に夫人が視察（T9.11.15）。

## 2) 大正10（1921）年

- ①東大教授関野貞\*33、石仏調査（T10.01.04）、町長及松井郡書記随行。この調査は、国宝保存会委員としての立場からである。大正7年関野は、龍門石窟を訪問したり、天龍山石窟を発見したりしており、当時日本において学術的価値が高まりつつある白杵石仏に対する関野の関心の強さが窺える。
- ②大分二十三銀行\*34員80名（T10.01.27）（☆甘棠館ニテ晚餐会 席上石仏ニ関スルー場ノ談話ヲナシタリ）
- ③九州八県聯合共進会\*35審査員・富田溪仙、山内多門、松本古村の3画家（T10.02.07）、本県内務部長随行。
- ④共進会審査委員・朝倉文夫、権藤種男、片岡角太郎\*36、日名子実三外1名（T10.03.23）、堺田町長、尾形郡長、平山県会議長、市川本県内務部長、佐藤警察署長、玉田郡書記随行。  
\*田口掬汀「泉都から摩崖仏へ」\*37を発表。  
\*工藤利三郎『豊州磨崖石仏 日本精華・第九輯』（日本精華社 T10.04.20）刊行（喜田貞吉序文）。写真家。仏像写真家。喜田貞吉とは郷里（徳島県）が一緒。
- ⑤大阪毎日新聞社長本山彦一\*38（T10.04.24）
- ⑥山本農相秘書官小坂順造（T10.05.07）、玉江農商務属長野豊州新聞社長（長野は、長野松太郎を示し、「新聞」は「新報」の誤り）同行。山本農相は、白杵市出身の山本達雄を示し、在任期間は、1918（大正7）年9月29日から1922（大正11）年6月12日。長野松太郎豊州新報社長が同行したのは、小坂が、同業者として信濃毎日新聞社長の経歴を持っていたことによるものと考えられる\*39。
- ⑦安部午生\*40（T10.05.11）視察。
- ⑧岡田三郎助画伯、小野玄妙（T10.08.30-31）。小野は、大正7年宗教大学教授。岡田は佐賀県出身の洋画家。両者は、帝国美術院より佐賀鶴殿と白杵の両石仏調査に派遣された。岡田はこの成果について、大正10年に「大分石仏の系統」\*41、続いて大正13年に「大分佐賀県の石仏」を発表し、一方小野は代表として大正12年8月に「大分の石仏に就て」\*42として報告している。

### 3) 大正11 (1922) 年

- 橋本関雪\*<sup>43</sup>画伯 (T11. 01. 22) 視察。
- 早大會津八一\*<sup>44</sup> (T11. 01. 27) 視察。書家・歌人・美術史家の會津八一は、集中的に大分の石仏研究を実施。この時會津は「石仏私見」(地方新聞関連記事)を發表。
- 下南津留小学校にて同地青年団総会の席上、深田石仏に関する講話をおこなう (T11. 02. 04)。徐々に知名度を上げていく白杵石仏の意義を紹介するために地元青年団へ向けて講話を行う小城の熱意が窺える。
- 佐伯高等女学校生徒150名、校長狭間俊雄以下職員6名に引率され石仏視察、出張案内 (T11. 02. 17)。地元高等学校の女子生徒にも関心が高まり、その名が流布していく様子が分かる。
- 太山寺出張調査。太山寺に参拝し住職宮崎智全師に面会 (T11. 03. 16-19)。太山寺は松山に所在する真言宗寺院。小城は、白杵と関連する真名長者伝承を調査する貴重な機会を得ている。
- 京大濱田耕作、澤村専太郎 (鈴木増次郎写真師随行 T11. 04. 06) を伴い視察。京大濱田指揮下の調査実施。澤村は、大正8 (1919) 年から同12 (1923) 年の間にアジャンター石窟関連の諸論文を『国華』に発表している\*<sup>45</sup>。 (『国華351・352・355・360・361・377・383・384・385・393・394・395・396』)。この時、記録写真を残すために、わざわざ京都から専属の写真師・鈴木増次郎\*<sup>46</sup>を同行させている
- 国民新聞社長徳富猪一郎\*<sup>47</sup>夫妻 (T11. 04. 25)。徳富蘇峰は、昭和4 (1929) 年、それまで約40年にわたって主宰した国民新聞社を引退し、大阪毎日新聞・東京日日新聞社の社賓となる。
- 大木遠吉\*<sup>48</sup> (司法大臣 T11. 05. 05)。大正9 (1920) 年原内閣に司法相として入閣 (山本達雄は農相務相)。大正11 (1922) 年加藤友三郎内閣では鉄道相 (第2代)を務めた。(初代鉄道相は原内閣の元田肇、国東来浦出身)
- 東大工學部長・塚本靖\*<sup>49</sup> (T11. 08 ●)。明治39~41年にかけて塚本は、すでに中国石窟 (鞏県・龍門・雲岡等) 踏査を試みており、石仏に関する広い知見を得ているので、白杵石仏について特に強い関心を抱いていたと考えられる。塚本は大正5年帝室技芸員撰撰委員、同6年古社寺保存会委員、さらに同9年宮内省内匠寮御用掛、同年東京帝国大学工學部長に任じられ、同11年特許局審判官を命ぜられている。
- 鉄道省史蹟調査囑託・小此木忠七郎\*<sup>50</sup> (T11. 08 ●) 調査。
- 内務省史蹟調査会委員・文学博士黒板勝美\*<sup>51</sup> (T11. 09 ●) 調査。
- 和田豊治\*<sup>52</sup> (1861~1924) 一行30名来町、視察 (T11. 11. 09)。
- 西本願寺・大谷尊由\*<sup>53</sup> (T11. 10 ●)\*兄は光瑞) 視察。
- 稲葉直通殿視察につき稲葉銀次郎、水谷幸太郎、丸毛豊田郎同行 (T11. 11)。稲葉は旧白杵藩主家\*<sup>54</sup>。藩主家は、廃藩置県後の明治17 (1884) 年、子爵となり華族に列した。

### 4) 大正12 (1923) 年

- 八幡浜観光団員数十名 (T12. 01. 27)。油屋熊八の郷里・八幡浜からの観光視察団来町。白杵石仏が観光資源としての役割を果たしている。
- 専売局長官野中清\*<sup>55</sup> (T12. 05. 01) 視察。
- 文部大臣鎌田栄吉\*<sup>56</sup> (T12. 05. 05) 視察。甘棠館にて歓迎会。鎌田は、大分とは縁が深く、明治19 (1886) 年大分中学校長、明治20年大分師範学校長兼学務課長を歴任。文部大臣としての訪問となれば、歓迎会もいっそう盛大であったと推測される。
- 本郡中部小学校教員会長の請に依り全会員20数名に現地講話 (T12. 05. 27)。小学校教員の間

にも広まっていく様子が窺える。

- 佐伯湾碇泊中の聯合艦隊主計長海軍主計大佐冬木庄一郎石仏を視察 (T12. 07. 27)。  
佐伯は、海軍と関係の深い碇泊地。碇泊中の聯合艦隊主計長の訪問は、白杵石仏の意義の広がり  
りと深さを示すものと考えられる。
- 内務省社寺局考證官史跡考查員荻野仲三郎<sup>\*57</sup>、内務省囑託田澤金吾、石仏調査。(T12. 08. 06-07/  
08. 24-25)。調査が内務省社寺局からも実施されるようになり、その意義の高さが窺われる。
- 日本銀行門司支店長保田次郎<sup>\*58</sup>と二十三銀行重役仲尾 (T12. 08. 28) 視察。
- 山口県柳井町より視察団 (T12. 11. 06)。柳井町の般若寺に真名長者及び般若姫の伝承が残っ  
ている。その縁で視察団の訪問となったものと考えられる。
- 第2師団兵士約3000名来町、宿営 自宅に3名宿泊 右一行中の福岡第24聯隊第2隊長 少佐  
坂坂順治<sup>\*59</sup>、石仏視察 (T12. 11. 16)。白杵石仏の意義が、海軍をはじめ陸軍にも及んでいる  
ことが窺える。
- 元司法大臣松室致<sup>\*60</sup>石仏視察 (T12. 11. 24)。
- 日豊線全通につき延岡を経て宮崎に至る (T12. 12. 15)。

## 5) 大正13 (1924) 年

- 県女子師範学校訓導2名、教生10余名を引率し視察 (T13. 02. 20)。地元白杵のみならず、県  
内においても大分県女子師範学校生徒の間で知られていく様子が窺える。
- 長崎控訴院検事長代理検事藤井健一、大分地方裁判所検事正和田良平随行 (T13. 03. 04) 視察。  
長崎控訴院<sup>\*61</sup>はこの時代、控訴院として東京、大阪に次いで格式があり、控訴院は1945年 (昭  
和20) に福岡に移転するまでは長崎に設置されていた。
- 長崎控訴院長手塚太郎<sup>\*62</sup>、大分地方裁判所長諸隈元次郎随行 (T13. 03. 16) 視察。
- 長崎控訴院部長駒田重義一行 (T13. 05. 08) 視察。この時期連続して長崎控訴院幹部の訪問が  
見られる。
- 当町出張中の検事及予審判事列、中野当警察署長の依頼を受けて石仏視察に随行 (T  
13. 05. 15)。前記の長崎控訴院幹部の訪問と連動しているものと推測される。
- ▲町役場出勤中、稲葉家より電話。東京御本邸家従職に聘用する旨について、丸毛御加談役より  
話あり。近親者と相談に取かかる。(T13. 05. 22)。旧藩主稲葉家からの依頼に対応する小城の  
心境が窺える。
- ▲稲葉家からの聘用の件は、考慮を重ねた上、遺憾ながら断る決意をし、丸毛御加談役に申出  
る。(T13. 06. 04) 前記5月の話を受けて身内で相談した結果を伝えている。
- 大橋寺へ滞在中の大分刑務所長江藤想 (「惣」の誤りか) 六<sup>\*63</sup>、石仏視察、同寺和尚同行 (T  
13. 07. 11)
- 白杵港碇泊中の練習艦隊司令部付軍艦浅間<sup>\*64</sup>乗組、海軍薬劑中尉岩崎斎介、石仏視察後、役  
場に来て夜半まで石仏に関して話を聞く (T13. 07. 26)。軍艦浅間には高松宮様乗艦の様子が  
窺える。
- 山階宮藤磨王<sup>\*65</sup>殿下深田石仏視察、宮内省供奉員2名、県保安課長及日名子史蹟調査員其他  
随行。林郡長、中野警察署長其他同行。小城は堺田町長に随行 (T13. 07. 27)。藤磨王は、東  
京帝国大学国史学科で黑板勝美に師事しており、この視察は、黑板が白杵石仏の調査を行った  
ことと関連性が高い。
- 矢野文部省督学官 (T13. 10. 07) 視察。

## 6) 大正14 (1925) 年

- 大阪毎日新聞専務取締役高木利太<sup>\*66</sup>外記者3名 (T14. 01. 25) 視察。高木利太は中津市出身、報道関係者の白杵石仏についての関心度の高さが窺える。
- 大分岩田高等女学校職員生徒530名 (T14. 02. 14) 視察。県立のみならず、私学の女子高等学校でも関心事となつて、知名度が高まっていることが分かる。
- 京大濱田耕作博士が、深田石仏の文献に関する件及小城自身の意見照会を求めてきた。調査報告書作成上の為であり返書を送る。(T14. 03. 25)
- 俳諧大家松瀬青々(弥三郎)<sup>\*67</sup>来町、石仏視察。小城は短冊一枚を頂く。松瀬は、明治33年大阪朝日新聞に入社し、俳句欄を担当していた。この時以下の句を残す。磨崖仏 此処天の散華や落椿 青々 (T14. 04. 08)。
- 内務省土木局技監市瀬□ 港湾調査の為来町 (T14. 04. 29)。日記は市瀬以下は欠字であるが、筆者の調査結果から、市瀬恭次郎<sup>\*68</sup>と判断した。
- 専売局経理部長佐々木謙一郎<sup>\*69</sup>、熊本専売支局長石原峯槌、福岡同支局長安部栄来町石仏視察 (T14. 06. 04)。
- 佐世保海軍人事部員海軍少佐中村季雄来町石仏視察 (T14. 06. 19)。この時期海軍・陸軍共に視察が目立つ。
- 大分聯隊区司令官歩兵中佐宇都宮□□一行 (T14. 06. 21)。宇都宮以下は欠字であるが、筆者の調査結果から、宇都宮三千雄<sup>\*70</sup>と判断した。
- 大分県知事松村□□一行 (T14. 07. 26) 視察。松村以下は欠字であるが、筆者の調査結果から、松村義一<sup>\*71</sup>と判断した。
- 京大濱田博士より「豊後磨崖石仏の研究」の寄贈を受ける (T14. 08. 29)。
- 大分、大野二郡に亘る石仏調査の為、大分市元町及東植田村高瀬の石仏を視察。犬飼町に出て俵屋へ投宿 (T14. 10. 23)。
- 同町渡無瀬石仏及井田村、長峰石仏を視、芝山八幡社を経て菅尾村、宇対瀬石仏を視察後、汽車で竹田駅に出て豊前屋へ投宿 (T14. 10. 24)。
- 中川神社に参詣、南蛮の鐘を見学、更に南緒方の石仏視察後、三重町に出て和泉屋へ投宿 (T14. 10. 25)。
- 内山観音に参詣し調査終了、午後5時帰着 (T14. 10. 26)。
- 大蔵省専売局製造部長石井淳二郎<sup>\*72</sup>一行来町 (T14. 10. 27) 視察。この日、塔ヶ迫(とうがさこ)畑に五輪塔浮彫二基発見。九水専務□□の寄進に係る木柵過半出来上がる。『深田の石仏』に「九州電気株式会社専務取締役・棚橋琢之助、資財一千元を提供し、県に木柵建設委託 (T14)」と記す。よって九水専務とは、棚橋琢之助<sup>\*73</sup>のことである。
- 石仏前、木柵竣工に付き調査の為、県土木課員2名 (T14. 10. 31) 視察。

## 7) 大正15 (1926) 年

- 伊予高濱太山寺住職宮崎智全師 1月31日遷化 (T15. 02. 10) 来る22日本葬相管候旨通知あり。
- 第6師団長福田彦助<sup>\*74</sup>中将同副官田中丸勝市少佐 (T15. 06. 04) 視察。福田は、1926年(大正15)3月、第6師団長に親補されている。
- 堺田町長 辞表提出 (T15. 06. 12)。
- 吏員一同 堺田元町長の送別会を甘棠館にて開く (T15. 06. 17)。
- 熊本専売局長有田靖来町 (T15. 06. 19) 視察。
- 宮内省式部官山縣武夫(儀式課長)並に属某矢野県属随行にて来町。これは今秋瑞典皇太子殿

下石仏視察のための下検分 (T15. 06. 23)。足立郡書記同行。早くもこの時期に瑞典皇太子同妃両殿下の10月白杵石仏訪問へ向けた準備が進められていることが分かる。

- 大分二十三銀行頭取長野善五郎<sup>\*75</sup>夫妻 (T15. 07. 20) 視察。瑞典皇太子の関心を抱き、皇太子自ら白杵石仏訪問を所望されており、地元大分でもその関心と期待がいつそう高まっている様子。地元大物実業家の訪問がそれを裏付けているものと考え。
- 京都府臨済宗大学教授、花園中学校長文学士手島文倉<sup>\*76</sup>一行来町 (T15. 08. 09) 視察。
- 新町長と深田に出張、石仏について詳細説明 (T15. 08. 17)。(当時の白杵町長は、東保高)
- 大分在住新聞記者数名並に簾野学務課長矢野県属一行が、予行視察の為来町 (T15. 09. 14)。
- 京都府庁技師兼京大講師坂谷良之進<sup>\*77</sup>来町 (T15. 10. 01) 同氏は鳥居に付き最蘊蓄が深い。
- 本県警察教育両部長官官房主事予行視察の為来町。今後9月20日を以て吏員を庶務、送迎、設備、道路、石仏の五係に分け、これに総務を置き歓迎準備をなす。自分(小城)は石仏係主任である (T15. 10. 03)。新体制として町役場に①庶務、②送迎、③設備、④道路、⑤石仏の五係に分け、これに⑥総務を設置し万全の準備を行う旨が窺える。
- 瑞典国皇太子グスタフ、アドルフ親王殿下並に同妃殿下御一行来訪。(T15. 10. 07)。  
御一行供奉員東宮大夫ニルス、東宮武官ルーデバック、公使書記官同夫人式部官山縣武夫、同子爵相馬孟胤<sup>\*78</sup>、外務事務官武藤義雄、京大濱田耕作博士、小川琢治博士、県より知事(欠員に付内裏内務部長)、学務部長、以下並に県会議長其他及び関西主なる各新聞記者、写真班等々 (T15. 10. 07)。以下にその具体的対応が見える。  
「東町長先導は堂ヶ迫より始め、濱田、小川両博士英語にて御説明申上ぐ 山縣式部官より日本方の人に対しては自分より説明され度旨下命あり 十三仏前の御休憩所にて両博士と旧を語り将来を談したり 二王像の処より町長ははずれて公園なる歓迎会場に赴きたり 依て自分代て御先導をなす 日吉塔前に至るや殿下握手を賜はる旨山縣式部官より注意あり 握手中殿下より縷々御詞あり 山縣式部官通訳(君が石仏につき深き趣味をもたれ、熱心に研究し居られることを聞こし召され、非常誠に喜ばれたとの意味なり)せられたり 0時半御視察を了り公園に向はせらる 同所にての歓迎終り御出発 午後二時四十五分、深田前御通過最後の奉送をなし、同五時前別府なる御旅館に御着在らせられたり 於是各係一同甘菜館に引揚げ慰労宴を開く。  
本日の白杵民友新聞 深田石仏御視察記事『小城書記に温かき握手を賜はつた 同書記は重ね重ね光栄に感泣した云々』との事見へたり 又大阪毎日新聞(西部毎日号)には日吉塔前にての場面を撮影し之を掲げあり 両殿下の脇のフロック姿は自分の御案内申上つつある処なり」と記す<sup>\*79</sup>。
- 二十三銀行杵築支店員の一団 午後は九州鉱業学会員の一団(40余名)(T15. 10. 17) 視察。
- 竹越興三郎(三又)<sup>\*80</sup>来町 前大野郡長宇都宮喜大、大阪商船会社別府支店長長久保勝之進、随同 (T15. 10. 19) 視察。
- 瑞典皇太子殿下御来町の砌、大阪毎日新聞に掲載されし深田日吉塔前に於ける場面の写真は、此上なき記念なれば、如何にもして其焼増一葉家宝として保存したく、即、同新聞関門支局長藤井公平に照会依頼せん処、快諾し呉れ殊に大形に引延ばし出来上りたりとて、本日一葉贈越されたとあり (T15. 10. 27)<sup>\*81</sup>。その掲載写真が図1である。
- 依願退職を白杵町長・東保高に提出 (T15. 10. 30)。永年勤務した白杵町役場を退職。
- 佐伯日本セメント会社社員曾根玄太郎(曾根専務<sup>\*82</sup>の兄)外6名来町石仏視察に付き、堀町会議員より依頼 (T15. 10. 31)。大正12年、佐伯日本セメント会社現専務取締役役に曾根茂夫が就

任した記事がある。

- 日本銀行門司支店長関根善作<sup>\*83</sup>来町 二十三銀行重役久保寺良吉、大分銀行支配人羽田栄重 随行、二十三銀行臼杵支店長福田多吉より依頼 (T15. 11. 07)。二十三銀行と大分銀行は、昭和2年(1927)に合併するが、それ以前の様子が窺える。
- 丸毛の依頼に依り、陸軍造兵廠技師・長澤寸美遠<sup>\*84</sup>一行 (T15. 12. 31) 視察。丸毛は、前出の丸毛豊田郎のこと、旧臼杵藩主稲葉家の御加談役。

## 8) 昭和2(1927) - 8(1933)年

- 昭和3(1928)年1月「元来、深田石仏に多く関係し、直接諸大家の新説を聞き又幾分検討をも重ねたる点に就て、自信もあることなれば之を収録し置くことは、郷土貢献の上からと自分の趣味を充たす上からとの二点に立脚して、強ち徒為ならざることを自覚し、予て其の企をなし井たりしが、遂に決意して其の草案に作製に着手したり」(S3. 01. 16)<sup>\*85</sup>。上記の文面は、『深田の石仏』を残すことへの小城の並々ならぬ決意が示されている。
- 同年7月「長澤寸美遠氏の紹介にて京橋区日吉町南春峯氏来宅 同人は外人来遊客のガイド業をなし兼て『ゼ ビュース エンド レビウス オブ ジャパン』なる英文雑誌を発行し、海外に向って日本観光の紹介をなしつつあるが、深田石仏を同誌に掲載したき為、自分の話を聞かん意にて来訪したる也 依て、石仏として優秀なること日本一の定評あること、其略歴とを聞かせたり」(S3. 07. 04)<sup>\*86</sup>
- 同年8月「南春峯氏より『ゼ ビュース エンド レビウス オブ ジャパン』八月号出来に付送り来る 依て、一冊を臼杵町長に送る」(S3. 08. 10)<sup>\*87</sup>
- 同年8月「南春峯氏の請に依り、深田に於ける瑞典皇儲殿下(皇太子)の写真を複写し、同人に送る 九月号の雑誌に掲載の為也」(S3. 08. 30)<sup>\*88</sup>

以下、小城長次郎『深田の石仏』の清書の様子を詳細に記録している<sup>\*89</sup>。

- |            |        |  |
|------------|--------|--|
| 昭和4(1929)年 | 3月23日  | 予ねて編集「深田石仏」は古文書略終了したるを以て巡覧篇の清書に取りかかる                                   |
| 同年         | 4月4日   | 「深田の石仏」巡覧の巻清書終る  |
| 同年         | 4月26日  | 「深田の石仏」諸説の巻清書終了 翌日より更に推敲にかかる   |
| 同年         | 5月18日  | 昨年五月起草の「深田の石仏」巡覧の巻、由緒の巻、諸説の巻、旧史の巻、以上四篇略脱稿せしを以て綴替をなす 残るところは凡例、序文、内容数ヶ所也 |
| 同年         | 6月26日  | 一先脱稿したる「深田の石仏」を更に推敲にかけたり   |
| 同年         | 10月30日 | 再、深田石仏の推敲にかかる  |
| 同年         | 11月26日 | 深田石仏に関する文献調査の為、帝国図書館 <sup>*90</sup> に行きたり                              |
| 昭和5(1930)年 | 11月16日 | 日曜休暇を受け上野帝国図書館に行き、深田石仏関係書類調査中、留守宅より電話 帰れとのことにつき、直に帰宅したところ、臼杵より進来勤来宅    |
| 昭和6(1931)年 | 1月25日  | 「深田石仏」原稿清書(復写)に取りかかる   |
| 同年         | 6月21日  | 深田石仏案内第一篇巡覧の巻清書終了  |
| 同年         | 7月21日  | 深田石仏案内第三篇観賞の巻清書終了  |
| 昭和8年       | 11月17日 | 院様の御写真を戴いた(大正5年武宮にて撮影)   |

### 【3】小城長次郎日記の意義

『六不之生涯』は、小城長次郎の私的部分を含む日記ではあるが、実は公的にも歴史的意義を多く持つ重要な資料である。明治17（1884）年元旦から昭和17年（1942）年10月10日までの約58年間の貴重な生活の記録が克明に描かれている。この日記には、自身や近親者や知人をはじめ皇族・華族・官僚・軍人・政治家・学者・画家・写真家・宗教家・文人・新聞記者・教育者・生徒・青年団・観光団・実業家・修復家等、実に多岐にわたる階層の人々が登場する。登場する小城家の家族の日常の悲喜交々、当時の社会事情や経済活動状況、その時代の様相等が克明に描かれているが、この中から筆者が抽出したのは、白杵石仏に関わる出来事のみである。日記に登場する膨大な出来事の中からほんの一部を抜き出しただけのことであるが、それだけでも実に驚くほどの件数の歴史的事実を丁寧かつ着実に記録している。この日記の歴史的資料価値が高いことのおかげで筆者は、白杵石仏に対する人々の関わりを詳細に知ることができ、かつその有意義な具体的内容について小論を執筆することができるのである。これと同様に『深田の石仏』も貴重であり、さらにこちらは学術的にも優れており、研究資料としての価値も一段と高いと言えることができる。この両者は、白杵石仏研究の上において、必須の基礎的資料となるものであり、研究者としては看過できない意義を持つものである。

#### おわりに

振り返って見れば、改めて『六不之生涯』は、貴重な価値を持つ重要資料と言える。特に小川博士の発表以降の社会の関心度が具体的に見えてくる点が優れている。白杵石仏研究史上において必須の基本的文献となり得るものと確信する。日記の意義もさることながら、小城自身の述べる次の言葉は見事である。

すなわち「之を収録し置くことは、郷土貢献の上からと自分の趣味を充たす上からとの二点に立脚して、強ち徒為ならざることを自覚し、予て其の企をなし井たりしが、遂に決意して其の草案に作製に着手したり」\*<sup>91</sup>と。

町役場の書記掛という役職柄とは言え、稀有で有意義かつ克明な記録を残された小城長次郎の業績を讃えたい。

最後に村上ヒサ子（小城長次郎の孫娘）様からの『六不之生涯』の御恵与に対し、心より深く感謝申し上げます。

#### 図版出典一覧

図1 『六不之生涯』／図2 大分合同新聞社提供

#### 註

- 
- \* 1 『六不之生涯 小城長次郎日記』発行者・村上ヒサ子（株）関東図書 平成25年
  - \* 2 小城長次郎『深田の石仏』ガリ刷版 昭和4（1929）年
  - \* 3 小川琢治『日本石仏小譜』大正3年（私家版 写真20葉のみ 文章なし）小川博士のご母堂の供養に作製された。

- \* 4 大村西崖「大分県下の古石仏に就いて」(『美術之日本 9-9』審美書院 大正6年)
- \* 5 大村西崖『東洋美術大観 第15冊 彫刻之部』審美書院 大正7年
- \* 6 小野玄妙『大分の石仏に就て』帝国美術院 非売品 大正12年3月。小野・岡田両教授の大正10年8月の調査報告。
- \* 7 「満月寺磨崖仏乃研究」(『仏教美術第一巻第三号』) 仏教美術社 大正10年
- \* 8 工藤利三郎『豊州磨崖石仏乃研究 日本精華・第九輯』精華苑 大正10年4月20日
- \* 9 太山寺(松山)宮崎智全老師(70歳余)が、白杵へ巡錫し、満月寺再興の念願を立てている(『深田の石仏』98頁)。
- \* 10 濱田耕作『豊後磨崖石仏の研究』京都帝国大学 大正14年8月10日
- \* 11 仲嶺真信「瑞典皇室と白杵石仏」(『別府大学紀要58号』別府大学 2017年)
- \* 12 前掲『六不之生涯』の「はじめに」の箇所であるが、ここには頁数なし。
- \* 13 前掲『六不之生涯』所収写真。写真の通し番号がないが、前から4枚目の頁にある2枚の内の1枚として掲載。
- \* 14 大分合同新聞社データベース部の提供。
- \* 15 『六不之生涯』305頁
- \* 16 小川琢治「九州の石仏 一・二」(『国華292号・293号』国華社 大正3年)
- \* 17 Wikipediaによると「内田嘉吉(1866~1933)は、1910(明治43)年8月、台湾総督府民政長官となり台湾に赴任、1915(大正4)年10月までこれをつとめた」と記す。<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%86%85%E7%94%B0%E5%98%89%E5%90%89> アクセス2016.11.30  
通信官僚として日本の海事関係に関する法律の整備などに尽力、また台湾総督も務め植民地行政に携わった。千代田区立日比谷図書文化館 Website [http://hibiyal.jp/hibiya/labo\\_01.html](http://hibiyal.jp/hibiya/labo_01.html) アクセス2017.01.02
- \* 18 南方熊楠顕彰館 Websiteによると「徳川頼倫(1872-1925)明治・大正期の華族。侯爵、貴族院議員。日本図書館協会総裁、史蹟名勝天然記念物保存協会会長などをつとめた。南方熊楠とは明治29年~30年の欧州遊学の際ロンドンで出会う。「南方植物研究所」設立発起人の一人で熊楠の活動を支援」とある。南方熊楠顕彰館 MINAKATA KUMAGUSU ARCHIVE <http://www.minakata.org/cnts/news/index.cgi?v=d9700&p=0> アクセス2016.11.03
- \* 19 天沼俊一「深田の石塔」(『考古学雑誌第六巻第十号』考古学会 T5.06.05) この調査は1月に実施(『深田の石仏』139-143頁)。
- \* 20 Wikipediaによると「大夢は号、本名は土屋元作：1906年(明治39)東京朝日新聞政治部長兼大阪通信部長。1911(明治44)年2月大阪本社に転じ、1914(大正3)年5月論説委員兼顧問、12月出版部長となり、『朝日年鑑』発行等に関わった」と記す。<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9C%9F%E5%B1%8B%E5%85%83%E4%BD%9C> アクセス2016.11.23/『明治大正人物事典Ⅱ 文学・芸術・学術篇』日外アソシエーツ2011年 417-418頁参照。
- \* 21 大村西崖「大分県下の古石仏に就いて」(『美術之日本 9-9』審美書院 T6.09.15)
- \* 22 学校法人根津育英会武蔵学園 Websiteによると「本間則忠は、大正3年大分県理事官」と記す。  
<http://www.musashigakuen.jp/ayumi/kinenshitsu/tenzi/ryakuden/ryakuden04.html> アクセス2016.11.23
- \* 23 『日本近現代人名辞典』によると「喜田貞吉は、1908(明治41)年には京都帝大講師、大正8(1919)年から個人雑誌『民族と歴史』を刊行。大正9年内田銀造逝去のあとをおそって、京都帝大教授となって国史学講座を担当」と記す。白井勝美他『日本近現代人名辞典』吉川弘文館 2001年 339-340頁
- \* 24 『六不之生涯』247頁
- \* 25 『大分県歴史人物事典』によると「日名子太郎は、大正期に大分県史跡名勝記念物調査委員」と記す。『大分県歴史人物事典』大分合同新聞社 1996年 414頁
- \* 26 堺田町長とは堺田次郎を示す。白杵町役場にて小城書記が仕えた当時の町長。『六不之生涯』239頁、245頁、248頁、250頁。
- \* 27 『深田の石仏』148-151頁
- \* 28 大村西崖「豊後磨崖石像-帝国美術院にて調査に着手す-」(『美術写真画報 一ノ七』博文館 T9.08.01)
- \* 29 朝倉文夫「豊後美術史の研究を提唱す」/中村不折「日本一の石仏と其保護に就いて」は共に『美術写真画報 一ノ七』(博文館 T9.08.01)所収。
- \* 30 『明治大正人物事典Ⅰ』によると「柴五郎は、大正2年中将、下関要塞司令官、大正8年大将、台湾司令官」

- と記す。『明治大正人物事典Ⅰ 政治・軍事・産業篇』日外アソシエーツ 2011年 308頁
- \*31 Wikipediaによると「新妻駒五郎(1855年10月-1937年8月12日)は、1917(大正6)年大分県知事に就任、4年強在任。知事を退いたのち小倉市長を1期務めている」。  
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%96%B0%E5%A6%BB%E9%A7%92%E4%BA%94%E9%83%8E> アクセス2016.10.12
- \*32 関関学 Websiteによると「大給松平家は、大分の府内城主で後に大給子爵。大給近孝 子爵。貴族院議員、父：大給近道」と記す。関関学 Website 大給家(大分県) <http://keibatugaku.seesaa.net/article/441485730.html> アクセス2016.11.20
- \*33 東京文化財研究所データベース資料「物故者記事」によると「関野貞は、大正7年建築史研究の為支那、印度、英、仏、伊の諸国に留学を命ぜられ、同9年帰朝、直ちに教授となり、従前の通り内務、文部両技師を兼任し、古社寺(現今の国宝)保存会委員、史蹟名勝天然紀年物調査会臨時委員を務めた」。東京文化財研究所 Website <http://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/8505.html> アクセス2016.11.30/関野貞「天龍山石窟」(『国華第32編第375号』国華社 T10.08)は、後に『支那の建築と芸術』岩波書店 昭和13年9月10日に収録。
- \*34 大分銀行 Websiteによると二十三銀行について「明治10(1877)年二十三国立銀行が営業開始。明治30(1897)年第二十三国立銀行を(株)二十三銀行と改称。大正2(1913)年には、二十三銀行本店を碩田橋(現府内町)に新築開店。大正4(1915)年大分銀行本店を竹町に新築開店。昭和2(1927)大分銀行と二十三銀行が合併し、(株)大分合同銀行が成立」と記す。  
 大分銀行 Website: OITA BANK THE 120th ANNIVERSARY <http://www.oitabank.co.jp/company/120nenni.html> アクセス2016.11.23
- \*35 『大分歴史事典』によると「共進会は、九州と沖縄8県の産業発展をはかるため、共同で産物や製品を集め、優劣を比べて広く関係者の参考に供した博覧会。明治15(1882)年に長崎県で第一回開催。大分県では明治21年と大正10(1921)に開催」と記す。株式会社大分放送・大分歴史事典刊行本部『大分歴史事典』平成2年 771頁/『日本史広辞典』によると「富田溪仙(1879-1936)日本画家、福岡県出身」と記す。日本史広辞典編纂委員会『日本史広辞典』山川出版 1997年 1567頁。また『日本人名大辞典』によると「山内多門(1878-1932)は、日本画家、宮崎県出身、帝展審査員」と記す。『日本人名大辞典』講談社 2003年 1953頁。さらに大分県立上野丘高校 Websiteによると「松本古村(明治7-昭和22)は、大分県立大分中学校(現上野丘高校)の日本画教師」と記す。  
 上野丘高校 Website [http://www.uenogaoka.net/alumni/hp/000/post\\_188.html](http://www.uenogaoka.net/alumni/hp/000/post_188.html) アクセス2016.12.24/参考東京文化財研究所(以下、東文研) Website <http://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/9322.html> アクセス2016.12.24
- \*36 『日本史広辞典』によると「朝倉文夫(1883-1964)は、大分県出身。東京美術学校卒。1921(大正10)年母校教授」と記す。『日本史広辞典』山川出版 1997年 38頁/大分市 Websiteによると「権藤種男(1891-1954)は、大分市生まれ。1912年東京美術学校卒業、大分県女子師範学校教諭となる。1920(大正9)年第2回帝展特選。1930年第11回帝展特選。1946年大分県美術協会初代会長となる」と記す。  
 大分市 Website <http://www.city.oita.oita.jp/www/contents/1328683629164/index.html> アクセス2016.12.09  
 大分県立美術館(OPAM) Websiteによると「片岡角太郎(1890-1934)は、佐伯市に生まれる。大正6年東京美術学校卒。大正8年第1回帝展に「黎明」が初入選、以後連続入選」と記す。大分県立美術館(OPAM) Website [http://opamwww.opam.jp/collection/detail/d\\_writer\\_master/253;jsessionid=2C6EA1F7289AB3980069E63C764076D8](http://opamwww.opam.jp/collection/detail/d_writer_master/253;jsessionid=2C6EA1F7289AB3980069E63C764076D8) アクセス2016.12.09
- \*37 田口掬汀「泉都から摩崖仏へ」(『中央美術7-4』日本美術学院 T10.04.1) / 東文研データベース資料「物故者記事」によると「田口掬汀は、美術雑誌「中央美術」を主宰。大阪毎日、東京日日などの記者をつとめ、美術一般に造詣深く創作評論で知られた。当時の日本画壇に大きな影響を与えた」と記す。東文研 Website <http://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/8765.html> アクセス2016.12.09
- \*38 国立国会図書館 Website「近代日本人の肖像」によると「本山彦一は、熊本県出身。明治22年『大阪毎日新聞』相談役、同36年社長に就任。経営の拡大に尽力し、関西新聞界、続いて関東においても朝日・毎日独占体制を築き、全国紙にぞだてた」と記す。国立国会図書館 Website「近代日本人の肖像」  
<http://www.ndl.go.jp/portrait/datas/569.html?cat=63> アクセス2016.12.13
- \*39 『日本史広辞典』によると「山本達雄(1856-1947)は、明治から昭和期の銀行家・政治家。大分県白杵市

出身。第5代日本銀行総裁就任(1898-1903)。大蔵大臣(第2次西園寺内閣)・農商務大臣(第1次山本内閣・原内閣)・内務大臣(斎藤内閣)を歴任」と記す。『日本史広辞典』山川出版社 1997年 2156頁

『日本近現代人名辞典』によると「小坂順造(1881-1960)は、明治から昭和にかけての実業家、政治家。長野県生まれ。明治37(1904)年日本銀行に入行。明治44(1911)年長野商業会議所会頭・信濃毎日新聞社長。明治45(1912)年衆議院議員に当選、立憲政友会に所属。大正7(1918)年農商務大臣秘書官、大正11(1922)年同省勅任参事官。大正13(1924)年の政友会分裂後、山本達雄とともに政友本党に入り、のち立憲民政党に属し、昭和6(1931)拓務政務次官」と記す。白井勝美他『日本近現代人名辞典』吉川弘文館 2001年 415頁参照

『大分県人名辞書』によると「長野松太郎は、豊州新報社長。大分県警察界に奉職すること10年。明治27年以来豊州新報社長に在職。元田肇(1920-1922:原内閣鉄道大臣)、朝倉親為氏等と大分県豊州会を組織し改進黨に対抗し、次いで政友会大分県支部設置に尽力」と記す。編纂兼発行人・小俣愨『大分県人名辞書』大正6年 262頁

- \*40 大分県立大分上野丘高等学校同窓会 Website によると「安部午生は、元勸業銀行理事」と記す。大分県立大分上野丘高等学校同窓会 Website [http://www.uenogaoka.net/alumni/hp/000/post\\_198.html](http://www.uenogaoka.net/alumni/hp/000/post_198.html) アクセス2016.12.25/ちなみにWikipediaによると「勸業銀行歴代総裁:勸業銀行総裁第3代山本達雄 1909年11月29日-1911年8月30日(任期)」と記す。<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E5%8B%A7%E6%A5%AD%E9%8A%80%E8%A1%8C> アクセス2016.12.25
- \*41 岡田三郎助「大分石仏の系統」(『美術之日本 13-9』審美書院 T10.09.20) / 岡田三郎助「大分佐賀県の石仏」(『国民美術242』国民美術協会 T13.02.01 / 大正期の白杵石仏調査研究の内容分析と詳細については、仲嶺真信「大正期における白杵石仏の研究について」『芸術学論叢 No.12』別府大学文学部美術史学科 1996年を参照 / 『日本史広辞典』によると「岡田三郎助(1869.1.12~1939.9.23)は、1919年帝国美術院会員となる」と記す。『日本史広辞典』山川出版社 1997年 337頁 / 東文研データベース資料「物故者記事」によると「小野玄妙(没年月日:1939/06/27)は、大正(1920)年以後文部省国宝調査会委員」と記す。東文研 Website <http://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/8521.html> アクセス2016.12.13
- \*42 注6参照
- \*43 『日本史広辞典』によると「橋本閑雪(1883.11.10~1945.2.26)は、大正昭和前期の日本画家。1934(昭和9)年帝室技芸員。1935年帝国美術院会員」と記す。『日本史広辞典』山川出版社 1997年 1740頁
- \*44 仲嶺真信「會津八一と大分の石仏-大正十~十一年間における古美術遍歴を中心に-」(『芸術学論叢 第18号』別府大学文学部芸術文化学科 2005年)
- \*45 高野山霊宝館 Website によると「澤村専太郎は、大正15年10月2日瑞典皇太子に随行し高野山案内」と記す。<http://www.reihokan.or.jp/bunkazai/nenpyo/sweden.html> アクセス2016.12.24  
『明治大正人物事典Ⅱ』によると「沢村専太郎は、美術史学者 京都帝国大学教授。明治42年上京、東京帝国大学大学院で瀧村一に師事。雑誌「国華」編集を経て、8年京都帝国大学助教授」と記す。『明治大正人物事典Ⅱ 文学・芸術・学術篇』日外アソシエーツ 2011年 299頁  
大正期の白杵石仏関連記事については、仲嶺「大正期における白杵石仏の研究について」『芸術学論叢 No.12』別府大学文学部芸術文化学科 1996年参照。
- \*46 鈴木マイクロフィルム研究所の会社案内下記 Website によると「鈴木増次郎写真師について:戦前は京都大学で写真師、戦後は鈴木マイクロフィルム研究所設立。鈴木増次郎が個人商店鈴木マイクロフィルム研究所を創業。京都大学をおもな取引先とし文献複写を手掛ける。鈴木マイクロフィルム研究所は、京都市左京区吉田牛ノ宮町3-7にある」。  
Website <http://www.suzukimicro.co.jp/annai.htm> アクセス2016.12.13
- \*47 『日本近現代人名辞典』及び国立国会図書館 Website によると「徳富猪一郎は、熊本県生。『将来之日本』(1886)で好評を得て上京、民友社を創設。『国民之友』『国民新聞』を発刊し平民主義を唱えた。明治30年(1897)松方内閣の内務省勅任参事官に就任、桂内閣にも深く関与した。昭和4年(1929)国民新聞社を退き大阪毎日新聞の社賓となる」と記す。  
<http://www.ndl.go.jp/portrait/datas/298.html?cat=48> アクセス2016.12.13 / 白井勝美他『日本近現代人名辞典』吉川弘文館 2001年 712頁
- \*48 大木遠吉について『明治大正人物事典Ⅰ』(日外アソシエーツ 2011年)115頁と国立国会図書館「近代日本人の肖像」を参照した。「大木遠吉は、政治家 学習院卒。伯爵。41年貴族院議員。大正9年(1920)原

- 内閣の司法相、続く高橋内閣でも留任し、11年加藤友三郎内閣の鉄相に就任。退官後は政友会と政友本党の合同問題に尽力」と記す。<http://www.ndl.go.jp/portrait/datas/457.html?cat=33> アクセス2016. 12. 13
- \*49 東文研データベース資料「物故者記事」によると「塚本靖：没年月日：1937. 08. 09帝国芸術院会員」と記す。東文研Website <http://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/8510.html?hilite=%E5%A1%9A%E6%9C%AC%E9%9D%96> アクセス2016. 12. 23/東京国立博物館 Website によると、塚本が中国調査時の収集した貴重な資料を展示している。「清国踏査遊記—関野貞・塚本靖が撮影した史跡写真」平成館企画展示室2016年7月26日(火)～同年9月4日(日)。東京国立博物館 Website [http://www.tnm.jp/modules/r\\_free\\_page/index.php?id=1811](http://www.tnm.jp/modules/r_free_page/index.php?id=1811) アクセス2016. 11. 23
- \*50 『明治大正人物事典Ⅱ』によると「小此木忠七郎：考古学者。1866年～1939年10月20日。大正9年以降は、福島県学務部嘱託や県史跡調査主任を歴任し、福島県内の史跡文化財の調査に当たった」と記す。『明治大正人物事典Ⅱ 文学・芸術・学術篇』日外アソシエーツ 2011年 137頁
- \*51 『日本近現代人名辞典』によると「黒板勝美：1874-1946。明治から昭和時代前期にかけての国史学者。長崎県波佐見村出身。大正8（1919）年史料編纂官兼東京帝国大学教授となり、翌9年からは教授専任となる。（中略）文部省関係では国宝保存会、史蹟名勝天然記念物調査会、重要美術品等調査委員会などの委員となって文化財の保存に努め、特に史跡保存の根本方針を定めた功は大きい」と記す。白井勝美他『日本近現代人名辞典』吉川弘文館 2001年 388-389頁
- \*52 国立国会図書館「近代日本人の肖像」によると「和田豊治は、大分県出身（1861年12月19日～1924年3月4日）明治17年（1884）慶應義塾を卒業後、渡米。帰国後、日本郵船に入社。その後、三井銀行、鐘淵紡績を経て、34年経営不振に直面していた富士紡績の専務となり経営を再建。大正5年（1916）東京瓦斯紡績を合併した富士瓦斯紡績の社長に就任。鐘紡の武藤山治と並び称される紡績業界のリーダーとなる。11年貴族院議員に勅撰され、また同年日本経済聯盟会（後の経団連）常務理事となる」と記す。国立国会図書館 Website <http://www.ndl.go.jp/portrait/datas/453.html?cat=72> アクセス2016. 10. 20
- \*53 『日本仏教人名辞典』によると「大谷尊由：明治から昭和の浄土真宗本願寺派の僧。政治家」と記す。編集・日本仏教人名辞典編纂委員会『日本仏教人名辞典』法蔵館 1992年 87頁
- \*54 閩閩学 Website によると「◆稲葉直通 父：稲葉順通（子爵）/母：酒井鑑子（伯爵 酒井の娘）/妻：西郷道子（侯爵西郷従徳の長女）」と記す。閩閩Website <http://keibatugaku.seesaa.net/article/439692501.html> アクセス2016. 12. 15
- 『大分県人名辞書』によると「稲葉銀次郎：（北海道郡白杵町）旧白杵藩主稲葉家の族戚也。夙に学を慶應義塾に攻め、帰来白杵私学校に教鞭を執ること数年、後ち県郡町会議員、白杵奨学会長、私立白杵商業学校校長等に推さる。現に北海道郡教育会長たり」と記す。小俣愨『大分県人名辞書』東洋印刷株式会社 大正6年 2頁
- \*55 コトバンク Website によると「野中清：1872-1963 明治-大正時代の官僚。明治5年8月生まれ。大蔵省にはいり、大蔵省参事官、神戸税関長などをへて大正7年専売局長官。13年朝鮮銀行総裁。福岡県出身」と記す。  
<https://kotobank.jp/word/%E9%87%8E%E4%B8%AD%E6%B8%85-1100241> アクセス2016. 12. 15
- \*56 『日本近現代人名辞典』によると「鎌田栄吉：1857-1934 明治から昭和時代前期にかけての教育家、政治家。明治17年内務省御用掛、明治19年大分中学校長、明治20年大分師範学校校長兼学務課長を歴任。さらに慶應義塾教授・評議員を経て31年より大正11（1922）年まで塾長を勤めた。衆議院議員に当選。大正11年加藤友三郎内閣文部大臣に就任」と記す。白井勝美他『日本近現代人名辞典』吉川弘文館 2001年 296頁
- \*57 東文研データベース資料によると「荻野伸三郎：没年月日：1947. 05. 21。元国宝保存会委員。国宝保存会委員、重要美術品等調査委員会委員、史蹟名勝天然記念物調査委員会委員等を歴任し、古美術保存事業に尽力した」と記す。東文研 Website <http://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/8735.htm> アクセス2016. 10. 28/同様「田澤金吾：没年月日：1952. 09. 26。文化財専門審議会工芸品部、考古民俗資料部会専門委員田沢金吾。大正6年頃から考古学の研究に志し、同7年以来、和歌山県、内務省、東京帝国大学、文部省、国立博物館等の嘱託として史蹟名勝、重要美術品の調査に従事した。昭和24年文部技官に任ぜられ、国立博物館調査課に勤務し、同25年文化財保護委員会事務局の保存部美術工芸品課に転じ、27年退官した。昭和25年文化財専門審議会委員となつた」と記す。東文研 Website <http://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/8943.html> アクセス2016. 12. 15
- \*58 デジタル版日本人辞典+Plusによると「保田次郎：1875-1949 大正-昭和時代前期の銀行家。日本銀

- 行にはいり、京都、門司、名古屋の各支店長、国庫局長をつとめる。昭和3年日本興業銀行副総裁となり、10年台湾銀行頭取」と記す。<https://kotobank.jp/word/%E4%BF%9D%E7%94%B0%E6%AC%A1%E9%83%8E-1116490> アクセス2016. 12. 15/Wikipediaによると「第二十三国立銀行：大分銀行の前身となった明治期の銀行。1873年（明治6）に大分町に設立された。日本銀行の斡旋で、1927年（昭和2年）に大分銀行と合併し、大分合同銀行となる」と記す。
- <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%AC%AC%E4%BA%8C%E5%8D%81%E4%B8%89%E5%9B%BD%E7%AB%8B%E9%8A%80%E8%A1%8C> アクセス2016. 12. 15
- \*59 歴史が眠る多磨霊園 Websiteによると「板坂順治：?～ 1944. 3. 16（昭和19）明治・大正・昭和期の陸軍軍人（少将）」と記す。歴史が眠る多磨霊園 Website [http://www6.plala.or.jp/guti/cemetery/PERSON/A/itazaka\\_j.html](http://www6.plala.or.jp/guti/cemetery/PERSON/A/itazaka_j.html) アクセス2016. 12. 24/Wikipediaによると「日本陸軍の第2師団：1888年（明治21年）5月14日に仙台鎮台を改編して宮城県仙台区（翌年より仙台市）に設立された師団である。1945年（昭和20年）の陸軍解体まで、日本の主要な戦争に参加した」と記す。[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%AC%AC%E5%B8%AB%E5%9B%A3\\_\(%E6%97%A5%E6%9C%AC%E8%BB%8D\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%AC%AC%E5%B8%AB%E5%9B%A3_(%E6%97%A5%E6%9C%AC%E8%BB%8D)) アクセス2016. 12. 24
- \*60 『明治大正人物事典Ⅰ』によると「松室致：司法相 大審院検事総長 貴族院議員（勅選）1852年1月2日～1931年2月16日生 豊前国小倉。明治17年判事補、18年判事となり、以後浦和始審裁判所判事、東京地裁部長、東京控訴院判事を経て、31年長崎控訴院検事長、34年同院長、39年検事総長、行政裁判所長官などを歴任。大正元年桂内閣の司法相、3年皇室会計審査局長官、5年寺内内閣司法相、7～13年勅選貴族院議員、13年枢密顧問官。昭和3年会計検査官、懲戒裁判所長官などを務めた。大正2年より法政大学学長」と記す。『明治大正人物事典Ⅰ 政治・軍事・産業篇』日外アソシエーツ 2011年 577頁
- \*61 Wikipediaによると「控訴院は、大審院の下級、地方裁判所の上級に置かれた裁判所。裁判所官制（明治19年勅令第40号、実効性喪失）及び裁判所構成法（明治23年法律第6号、1947年（昭和22）廃止）に基づき、1886年（明治19）から1947年（昭和22）まで、日本各地にあった。裁判所法（昭和22年法律第59号）の高等裁判所に相当する。1945年（昭和20）～高松に設置（半年で廃止）。また、長崎控訴院が福岡に移転する」と記す。
- <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%8E%A7%E8%A8%B4%E9%99%A2> アクセス2016. 12. 15/グラバー園管理事務所下記 Websiteによると「長崎控訴裁判所は、1886年（明治19）に長崎控訴院に改称。その後、控訴院は1945年（昭和20）に福岡に移転」と記す。Website <http://www.glover-garden.jp/oldcourt.html> アクセス2017. 01. 03
- \*62 『明治大正人物事典Ⅰ』によると「手塚太郎：1862年1月16日～1932年11月19日/医師 手塚良仙の長男に生まれる。仙台地裁所長を経て、大阪地裁検事正となる。のち名古屋控訴院検事長、長崎控訴院院長などを歴任」と記す。『明治大正人物事典Ⅰ 政治・軍事・産業篇』日外アソシエーツ2011年 416頁
- \*63 江藤惣六について下記の論文参照。大正13年12月大分刑務所から福岡刑務所長に栄転。重松一義「獄典 江藤惣六伝」（『中央学院大学教養論叢第5巻第2号』中央学院大学商学部・法学部 平成5年1月）
- \*64 Wikipediaによると「浅間（あさま）：元1等巡洋艦。1921年（大正10年）9月1日、1等海防艦に変更（昭和6年に等級廃止）。主に練習艦隊参加艦として遠洋航海に従事」と記す。
- <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B5%B7%E9%98%B2%E8%89%A6> アクセス2016. 12. 16
- ／Wikipediaによると「高松宮（高松宮宣仁親王）：1905年1月3日-1987年2月3日）皇族。大正天皇と貞明皇后の第三皇子。今上天皇の叔父にあたる。有栖川宮の祭祀を継承。1921年（大正10）8月24日、海軍兵学校本科に編入（52期）。1924年（大正13）7月24日、海軍兵学校卒業、少尉候補生となったが9月に赤痢のために、候補生遠洋航海は断念。1925年（大正14）12月1日、海軍少尉に任官」と記す。
- <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%AB%98%E6%9D%BE%E5%AE%AE%E5%AE%A3%E4%BB%81%E8%A6%AA%E7%8E%8B> アクセス2016. 12. 16
- \*65 Wikipediaによると「筑波藤麿：1905年2月25日-1978年3月20日）日本の元皇族。旧名、藤麿王。山階宮菊麿王の第三王子。東京帝国大学国史学科で黒板勝美に師事。大学を卒業した後歴史研究を志し、東京代々木の自邸に筑波歴史研究室を作り、その年々の国史関係の文献目録を集めた『国史学界』を発行した。大学卒業後まもなく、1928年（昭和3）7月20日願により臣籍降下が認められ、筑波の家名を賜り侯爵に叙せられる。臣籍降下以後は侯爵議員として1947年（昭和22）まで貴族院議員を務める」と記す。
- <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%AD%91%E6%B3%A2%E8%97%A4%E9%BA%BF> アクセス2016. 12. 15
- \*66 『明治大正人物事典Ⅱ』によると「高木利太：新聞記者 大阪毎日新聞社専務 1871年1月19日～1933年

- 1月23日。大正7年専務に就任。大正15年退任したが、昭和3年再び常務となり、7年退職した」と記す。  
『明治大正人物事典Ⅱ 文学・芸術・学術篇』日外アソシエーツ 2011年 358頁
- \*67 『明治大正人物事典Ⅱ』によると「松瀬青々：俳人 1869年4月4日～1937年1月9日。明治28年第一銀行大阪支店に入社。そのかわら国学と和歌を学ぶ。この頃から俳句に親しみ「ホトトギス」編集員。33年帰阪。大阪朝日新聞社に入社し、俳句欄を担当」と記す。『明治大正人物事典Ⅱ 文学・芸術・学術篇』日外アソシエーツ 2011年 586頁
- \*68 『明治大正人物事典Ⅱ』によると「市瀬恭次郎：土木技師 内務技監 1867年6月23日～1928年8月15日。明治23年内務省土木監督署技師補となる。38年土木局に転じ、大正2年仙台土木出張所長、8年神戸出張所長を経て、13年内務技監。河川港湾の土木工事に従事した」と記す。『明治大正人物事典Ⅱ 文学・芸術・学術篇』日外アソシエーツ 2011年 54頁
- \*69 Wikipediaによると「佐々木謙一郎；1882年12月29日-1953年6月29日 日本の大蔵官僚、専売局長官。南満州鉄道副総裁。1923年（大正12）より専売局経理部長、事業部長、販売部長を経て、1932年（昭和7）に専売局長官に就任」と記す。<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BD%90%E3%80%85%E6%9C%A8%E8%AC%99%E4%B8%80%E9%83%8E> アクセス2016. 12. 17
- \*70 下記 Websiteによると「大分聯隊区司令官；宇都宮三千雄歩兵大佐：不詳-1928年8月10日」と記す。  
[http://www.weblio.jp/wkjpja/content/%E5%A4%A7%E5%88%86%E9%80%A3%E9%9A%8A%E5%8C%BA\\_%E5%A4%A7%E5%88%86%E9%80%A3%E9%9A%8A%E5%8C%BA%E3%81%AE%E6%A6%82%E8%A6%81#E9.80.A3.E9.9A.8A.E5.8C.BA.E5.8F.B8.E4.BB.A4.E5.AE.98](http://www.weblio.jp/wkjpja/content/%E5%A4%A7%E5%88%86%E9%80%A3%E9%9A%8A%E5%8C%BA_%E5%A4%A7%E5%88%86%E9%80%A3%E9%9A%8A%E5%8C%BA%E3%81%AE%E6%A6%82%E8%A6%81#E9.80.A3.E9.9A.8A.E5.8C.BA.E5.8F.B8.E4.BB.A4.E5.AE.98) アクセス2016. 12. 17
- \*71 Wikipediaによると「松村義一（1883年9月7日-1959年1月6日）。日本の内務官僚、政治家。憲政会系官選県知事、貴族院勅選議員。1924（大正13）年7月、大分県知事に就任。1925年9月、内務省警保局長に転じ、1927年4月まで在任し退官した。\*大分県知事（官選第21代：1924-1925）」と記す。  
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9D%BE%E6%9D%91%E7%BE%A9%E4%B8%80> アクセス2016. 12. 17
- \*72 下記 Websiteによると「石井淳二郎：帝国大学農科大学農芸化学科卒専売局部長、製造部長」と記す。  
近代名家系大観 Website <http://ameblo.jp/derbaumkuchen/entry-12004301917.html> アクセス2016. 12. 24
- \*73 渋沢社史データベースによると「九州水力電気（株）社史二十年沿革史（1933.08）」の昭和4年の記事に「取締役副社長棚橋琢之助氏就任せり」と見える。  
[http://shashi.shibusawa.or.jp/details\\_nenpyo.php?sid=13530&query=%E6%A3%9A%E6%A9%8B%E7%90%A2%E4%B9%8B%E5%8A%A9](http://shashi.shibusawa.or.jp/details_nenpyo.php?sid=13530&query=%E6%A3%9A%E6%A9%8B%E7%90%A2%E4%B9%8B%E5%8A%A9) アクセス2016. 12. 17/『深田の石仏』115頁
- \*74 Wikipediaによると「福田彦助：（1875年11月5日-1959年7月30日）、日本陸軍の軍人。1920年（大正9）8月、陸軍少将に進級し歩兵第6旅団長に着任。第15師団司令部付を経て、1925年（大正14）5月、陸軍中將に進み下関要塞司令官に着任。1926年（大正15）3月、第6師団長に親補」と記す。  
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A6%8F%E7%94%B0%E5%BD%A6%E5%8A%A9> アクセス2016. 12. 17  
/また Wikipediaによると「第6師団：1872年（明治5）に設置された熊本鎮台を母体に1888年（明治21）5月14日に編成された師団であり、熊本・大分・宮崎・鹿児島九州南部出身の兵隊で編成され衛戍地を熊本とする師団である」と記す。  
[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%AC%AC%6E%5B%8A%AB%E5%9B%A3\\_\(%E6%97%A5%E6%9C%AC%E8%BB%8D\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%AC%AC%6E%5B%8A%AB%E5%9B%A3_(%E6%97%A5%E6%9C%AC%E8%BB%8D)) アクセス2016. 12. 17
- \*75 『大分歴史人物事典』によると「長野善五郎（1857年～1931年）実業家。二十三銀行頭取。明治8（1875）年大分県勸業御用係に任ぜられたが、間もなく辞し、同9年に中尾喜平、磯部八郎次、小林助善らと国立二十三銀行を創設。30年には株式会社二十三銀行になるが、昭和2（1927）年に大分銀行と合併するまでの30年間、頭取を勤めた。この間、大分酒屋組合長、米穀取引所理事長、大分貯蓄銀行頭取、豊後電鉄株式会社社長など歴任、大正元（1912）年に大分紡績会社を設立。同社は大正11年富士紡績株式会社大分工場となり取締役に就任した。大分町会議員、郡会議員、大分築港調査委員、大分鉄道期成会幹事、大分教育会評議委員など公共的役割もはたした」と記す。『大分歴史人物事典』大分合同新聞社 平成8年 371頁
- \*76 花園大学下記 Websiteによると「花園大学（花園学園学校法人の沿革）：前身は臨濟宗大学。明治44年花園学院高等部は独立し、臨濟宗大学（4年制）と改称」と記す。Website <http://www.hanagaku.jp/history/> アクセス2016. 12. 17
- \*77 東文研データベース資料「物故者記事」によると「坂谷良之進 没年月日：1941.01.04。明治40年東京美術学校卒業後内務省に入り、古社寺保存調査を囑託せらる。大正7年奈良県技師に任ぜられ、同10年京都

府技師に転じ、国宝建造物の修理を監督すると共に、京都帝国大学工学部及び神戸高等工業学校に建築史或は工芸史を講じた。昭和4年文部技師に任ぜられ、国宝建造物保存事業の技師的統率者として、専ら意を修理技術の向上と、後進の指導とに致した」と記す。

東文研 Website <http://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/8547.html> アクセス 2016. 12. 17

- \*78 Wikipediaによると「相馬孟胤（1889年8月14日-1936年2月23日）。子爵。大正8年に父が没し家督を継ぎ襲爵。大正11年、式部官になり朝香宮御用掛を兼ね、のちに式部職庶務課長として楽部長、朝香宮御用掛を兼務した」と記す。  
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%9B%B8%E9%A6%AC%E5%AD%9F%E8%83%A4> アクセス2016. 12. 24
- \*79 『六不之生涯』304-305頁
- \*80 国立国会図書館「近代日本人の肖像」及び『日本近現代人名辞典』によると「竹越興三郎（1865-1950）。明治大正期の新聞記者、史論家、政治家。徳富蘇峰を知り民友社に入る。大正9年（1920）宮内省臨時帝室編修局御用掛、同10年編修官長として『明治天皇紀』編纂に携わった経歴を持つ。政友会に属し同11年に貴族院勅選議員、昭和15年（1940）年に枢密顧問官に任ぜられる」と記す。臼井勝美他『日本近現代人名辞典』吉川弘文館 2001年 619頁／国立国会図書館 Website <http://www.ndl.go.jp/portrait/datas/287.html?cat=44> アクセス2016. 12. 17
- \*81 『六不之生涯』305頁
- \*82 神戸大学経済経営研究所・新聞記事文庫によると（専務取締役曾根茂夫：神戸大学経済経営研究所 新聞記事文庫窯業（2-165）時事新報 1927. 4. 23（昭和2）。データ作成：2004. 2 神戸大学附属図書館）「同社の重役は専務取締役として前記曾根茂夫氏ら外（中略）何れも当代実業界に於ける錚々たるの士であるが就中曾根氏の如きは同社今日の発展を致せるに付最も力あるところにして又本邦セメント工業界に於ける功労者とも称すべきである」と記す。  
[http://www.lib.kobe-u.ac.jp/das/ContentViewServlet?METAID=00060482&TYPE=HTML\\_FILE&POS=1](http://www.lib.kobe-u.ac.jp/das/ContentViewServlet?METAID=00060482&TYPE=HTML_FILE&POS=1) アクセス2016. 12. 24
- \*83 関関学 関根家（埼玉県）によると「関根善作：日本銀行、川崎第一銀行専務、第一銀行頭取、三菱銀行副頭取／妻：小坂国（小坂順造の妹）」と記す。関関学 Website <http://keibatugaku.seesaa.net/article/439508311.html> アクセス2016. 12. 17
- \*84 国立公文書館・アジア歴史史料センター「公開資料目録」によると「陸蜜（陸軍省発令の文書区分）」の関連記事中に陸軍技師 長澤寸美遠の名が確認される。上記「公開資料目録」C01003796400 支那政府應聘継続の件 長澤技師 資料作成年月日：／作成者：陸軍技師 長澤寸美遠 [https://www.jacar.go.jp/siryo/ichiran/C\\_01/850.html](https://www.jacar.go.jp/siryo/ichiran/C_01/850.html) アクセス2016. 12. 19
- \*85 『六不之生涯』325頁
- \*86 『六不之生涯』328頁
- \*87 『六不之生涯』329頁
- \*88 『六不之生涯』329頁
- \*89 『六不之生涯』338-431頁を参照
- \*90 国際子ども図書館下記 Websiteによると「帝国図書館から国際子ども図書館へ：帝国図書館は、第二次世界大戦以前の日本における唯一の国立図書館。上野公園の丘にあることから、「上野図書館」の通称で長く親しまれた。現在の国際子ども図書館の建物は、1906（明治39）年に帝国図書館として建てられ、1929（昭和4）年に増築された明治期ルネサンス様式の建物を再生・利用したもの。戦後、帝国図書館は国立図書館と名称が変わり、1948（昭和23）年に国立国会図書館が創設されてその支部図書館となつてからは1998（平成10）年まで支部上野図書館の施設として使用されていた。2000（平成12）年、装いも新たに国立初の児童書専門図書館として開館」と記す。Website <http://www.kodomo.go.jp/about/outline/history.html> アクセス2016. 11. 15
- \*91 注85参照